

国際芥川龍之介学会 ISAS 第3回研究集会

【発表要旨】

研究発表

王青(大阪市立大学大学院生)

芥川龍之介「VITA SEXUALIS」と回想される幼年時代

芥川龍之介の残されたノートには「VITA SEXUALIS」(大正元年前後)という題の付いた草稿がある。時系列に「何歳の時だか覚えてゐない」から「中学二年」までの性に関する経験を回想した記録である。春画を見せられる／見る経験、生殖器への関心、マスターベーション、同性性行为等の事柄を記述している。森鷗外『キタ・セクスアリス』(明治四二・七)を模倣して書いた習作だと思われるが、自らの経験に基づいていることが考えられる。

「VITA SEXUALIS」は芥川生前未発表の早期習作と見なされてきたため、従来の研究において早澤正人氏の論がある以外には、ほとんど注目されてこなかったと言える。二十世紀初頭、作家自身が作中に登場するテキストが増加する中、二十歳前後の芥川が自己を告白し自分を書くことには、洋紙生産の増大と活版印刷技術の進歩によるジャーナリズムの急激な発展と、西洋の性科学や産婦人科医学の書物が翻訳されて導入されたこととの関係が見られる。本発表はまず「VITA SEXUALIS」(『芥川龍之介全集 第二十三巻』岩波書店、二〇〇八・一一)を物語としての一貫性を持ち、主人公「自分」の過去を追憶・回想し、幼少時代と思春期の性にまつわる体験を告白する自伝的小説として位置づけ、作家としてデビューする以前の芥川が、当時の文壇の影響を受けて幼少時代を形づくった経緯をたどる。

芥川作品における〈回想された幼少時代〉のイメージは、その後芥川の経験の積み重ねに伴い次第に変化し、晩期の作品「玄鶴山房」(昭和二・一)においてはノスタルジックな傾向に変貌していく。本発表は「VITA SEXUALIS」を出発点とし、語られた自己と回想された過去の書き方を性言説及び同時代コンテキストにおいて考察し、本作の芥川文学における新たな位置づけを提示したい。

運営委員会企画① 展覧会紹介

木口直子(田端文士村記念館研究員)

芥川龍之介旧居跡地に刻まれた記憶

【展覧会概要】* 田端文士村記念館ホームページより <https://kitabunka.or.jp/tabata/>

(仮称)芥川龍之介記念館開設準備に伴う埋蔵文化財発掘調査の中で、旧居跡地から発見された2つの防空壕跡。渋沢栄一らが設立した「耕牧舎」の牛乳瓶や芥川の主治医・下島勲が開業した「楽天堂医院」の薬瓶のほか、「丸善」のインキ瓶など、出土品とその背景にある当時の人々の生活についてご紹介します。

高橋博史(元白百合女子大学教員)

作品が開く読み ——「トロッコ」に即して

文学研究にとって、読むことは一番基本的なことであるがしかし、よく読むことはなかなか難しい。このことの自覚の上に、作品をよく読むことを通して、作品の持つ可能性を探ろうと試みています。例えば「トロッコ」です。この作品は一面でとても分かりやすい。子どもが新しい乗り物に憧れることも、家の遠くまで来てしまって不安に駆られながら一目散に帰るということも、私たちの経験世界でよく見かけることです。そうした経験世界の出来事を参照しながら、分かっていくことができます。しかし他方、最終部、雑誌社で校正の仕事をしている良平に関する部分は、とても分かりにくい。それで最終部の理解を巡って、様々な考えが示されることにもなります。ただそれらの議論を読んで気になるのは、それ以前の、八歳の時の良平の体験について、改めて検討し直そうとする姿勢に乏しいことです。それについては、大枠として分かっていることとして、議論が進められている。しかし、最終部がうまく理解できないということは、それ以前がちゃんと読めていないということではないか。

作品中、工事場のトロッコに乗って土工に叱られたすぐ後に、次の一文があります。

〈それぎり良平は使の帰りに、人気のない工事場のトロッコを見ても、二度と乗って見ようと思った事はない。〉

〈思ったことはない〉というのですから、そのときから語りの現在まで、良平はずっと、〈工事場のトロッコを見ても、二度と乗って見ようと思った事はない〉のです。ところがそうだとすると、十日ほどして枕木を積んだトロッコを見て、近づいていったことが、矛盾してしまうように思えます。そこで例えば、土工に叱られて二度と乗ろうと思わなくなったが、その後にもまた乗りたくなったというように、〈思った事はない〉ではなく、「思った事はなかった」と変形させて理解するのが一般的です。しかし、自分が理解しやすいように作品を変形させるのでは、読むとは言えません。良平八歳の時から現在までを見通して語っている語り手は、十日ほど後にトロッコに近づいていったことを承知しながら、なお〈乗りたいと思った事はない〉と言っているのです。だから、工事場のトロッコを見ても乗りたいと思ったことがないということと、十日ほどして本線になる線路を登ってきたトロッコを見て近づいていったことが両立するように、読む必要があります。

どう考えれば、二つが無理なく両立するでしょうか。そう読んだ場合、少年良平の体験は大人になった良平とどうつながり、最終部に漂う、ある寒々とした感じは、何に由来すると言えるでしょうか、こうした点を検討しながら、作品を読むということについて、改めて考えてみたいと思います。